

# 大分合同新聞 2021年4月15日 日本紙朝刊

工夫する者が生き残る

## 原点に立ち返る機会

コロナ禍に

# 原点に立ち返る機会



工夫する者が生き残る

現在は国内公演を再開したものの、また会場に出向くことを怖がる人は多い。観客の人数を絞る状況は当然続くのではないだろう

米国や国内のツアーなど600以上の公演が中止・延期になり、大打撃を受けた。あまりの規模に「解散が迫り込まれるかもしれない」という考えがよぎった。お客さんと呼んで、少しでも地元・竹田市のホテルや飲食店の支えなければという思いがあった。それでも、感涙広がりつつある状況で全国から人が集まるイベントを決定するまでに時間がかかった。

新型コロナウイルスはエンターテインメント業界を窮地に追い込んだ。竹田市久住町を拠点に国内外で活動する和太鼓集団「DRUM TAO（ドラムタオ）」も例外ではない。

タオ・エンターテインメント社長  
藤高郁夫さん(61) 竹田市



ふじたか・つくお 1959年、熊本市生まれ。外資系商社や大手流通企業で勤務。93年、愛知県小牧市でT A Oを結成した。よりよい練習環境を求めて、95年から竹田市久住町に拠点を構える。演出家・芸術監督として舞台の総指揮を執る。同町在住。

コロナ禍に想う  
おもう

談論 おおいた

(38)

## 誇りに思ってもらえる存在に

久住町で共同生活していたメンバーのうち7人が新型コロナに感染し、非難の矢面に立つた。

「危機管理が足りない」といった厳しい声をいただいた。集団感染を起し、心配をかけてしまった。その分、どこにも負けないくらいに感染対策を学んだ。一方で、消毒液やマスクなどの支拂物資や応援のメッセージも届いた。先々の不安を抱えながら過ごす中、大きな救いを感じる出来事だった。

当時は日々夕方の稽古も自粛した。そこで「公演以外の分野で、違う才能を身に着けよう」とメンバーに話した。映像制作、作曲、料理……。何でもいい。自分自身はどんな表現者になりたいのか。改めて考えてもった。

誰かを喜ばせたり驚かせたりすることが好きで、タオに入ってくる。その原点に立ち返る機会になったと思ふ。コロナ禍がなければ、そもそも突き詰めることはなかったろう。

日常は閉塞感に覆われている。どこかで心を解放する時間が必要だ。

昨年7月に名古屋市内で公演を再開した時、会場のお客さんの涙が見えてハッとした。こういっつぎにこそ帰郷不安を和らげ、心の支えにならないといけない。音楽を聴いて、感情が揺さぶられた経験はやはりあるはず。時には人々を思いやる優しい心や「自分も頑張ろう」という強い気持ちがあふく。東日本大震災や熊本・大分地震の支援活動で太鼓を披露したときにも、その力を実感した。

今後は各校での公演に力を入れてたいと思ってる。子どもたちが「大分じんなすこい」があるんだと、誇りに思ってもらえるような存在になりたい。

新型コロナは、エンターテインメントの在り方を変えていくのだろうか。

現在、オンライン配信に力を入れていく。ただ、それはあくまでも会場に来なくても来られない人のための代替手段。やっぱりエンタメは足を運んで、五感で楽しんでもらいたい。「デジタルの活字に飽きて筆文字が重宝されているように、これからはむしろアナログを求めているんじゃないか。臨機応変に対応する力が求められている。コロナ禍の前と同じことをするのはなく、状況に合わせて変えていく必要がある。工夫する者が生き残るはずだ。

（聞き手・池田美香）

随時掲載

本屋大

町田そのこ

小

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

「52ヘルツのワジラたち」の表紙

九州で初、県が支援金

九州で初、県が支援金

九州で初、県が支援金

九州で初、県が支援金